様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０５０１

研究課題名（和文）ドイツ語基本構文の構文文法的研究

研究課題名（英文）Construction Grammar approach to some basic constructions in German

研究代表者
宮下　博幸（MIYASHITA, Hiroyuki）

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：２０３４５６４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：構文文法はこれまで主に英語を対象として議論が行われてきたが、英語以外の言語を対象とする考察はまだ少ない。本研究はドイツ語の非人称構文、形容詞構文、結果構文を構文文法の視点から分析することで、構文文法がドイツ語の記述においても有用であることを示した。また近縁ではありながらも、英語とは別の構造を持つドイツ語で生じる理論上の課題、またそれが構文文法に与えるフィードバックの可能性も明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：Construction Grammar has been mainly discussed through the analysis of English and there are rather few studies based on other languages. This research analyzed impersonal construction, dative adjective construction, and resultative construction in German and indicated that constructional approach is also effective in the description of German. It also suggested some theoretical problems in describing German from the constructional perspective and also some possible theoretical feedback to this grammatical framework.

研究分野：ドイツ語学

キーワード：ドイツ語　構文文法　基本構文

１．研究開始当初の背景

構文文法 (Construction Grammar) は認知言語学における文法へのアプローチの一つとして 1980 年代に提案され、初期にはイディオムや特別な構文の説明に有力な枠組みとして登場したが (Fillmore et al. 1988, Lakoff 1987)、続く 90 年代には、より基本的な文の項構造の研究にも対象を広げられ (Goldberg 1995)、一言語全体を記述する理論としての地歩を固めてきた。しかし構文文法はこれまで主に英語を対象として議論が行われ、ドイツ語を構文文法の枠組みから包括的に考察する試みは行われていないという状況であった。そのため本研究ではドイツ語を構文文法の視点から分析することで、この理論の英語以外の言語の記述への応用可能性の探求、また英語とは別の構造を持つ言語で生じる諸問題の解決、さらにそれによる理論へのフィードバックを目指すこととした。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の 2 点である。

(1) 英語を対象言語として発展してきた構文文法をドイツ語に応用することで、ドイツ語母語話者が言語獲得において身につけてきた構文体系（＝文法）の一端を明らかにし、かつ構文文法のドイツ語への応用の有効性を検討する。

(2) ドイツ語に適用した場合に生じる、構文文法の理論的課題を追求することで、構文文法に対して理論的貢献を行う。

以上の目的を遂行するため、現代ドイツ語で頻繁に使われる、項構造を伴う基本構文のいくつかを対象とした。具体的には非人称構文のうち [*es* + 動詞] の構文形式をとるもの、自動詞構文のうち [与格名詞句 + コピュラ動詞 + 形容詞] の構文形式をとるもの、他動詞構文のうち [主格名詞句 + 動詞 + 対格名詞句 + 形容詞] の構文形式をとるものに注目して考察をすすめ、それぞれの構文としての性質を明らかにした。

３．研究の方法

研究は以下のような方法を用いて進めた。

(1) 対象とする構文の先行研究における記述を整理し、これまでの不明点を明らかにする。

(2) 電子コーパスを利用して、対象とする構文のデータを取集して用法基盤的 (usage-based) な立場から分析する。

(3) インフォーマント調査により、対象とする構文の使用の状況を分析する。

(4) 以上の分析の過程で明らかとなった構文文法の理論的問題を整理し、理論へのフィードバックを行う。

(5) 成果は適宜国内外での口頭発表や論文の形で公表する。

４．研究成果

本研究では当初の計画より対象を狭めることとし、「研究の目的」の箇所で述べた 3 つの構文を特に重点的に考察した。以下、それぞれについてその成果をまとめる。

(1) [es + 動詞] 構文の分析

es（英語の it に対応）をとる構文には統語的に興味深い現象がみられる。ドイツ語では任意の文の要素を比較的自由に定動詞の前の位置（＝前域）に置くことができ、その場合本来の主語は定動詞の後に置かれるが、es が主語位置にあって他の文要素が前域に移動したとき、es が通常の主語のように定動詞の後に必ず出現する場合、任意の場合、es が必ず出現しない場合がある。この現象は構文文法的に対し、それぞれの場合を異なる構文とみなすべきか否かという問題を提起するものである。本研究はこの現象に対し、es を伴う構文は es の必須性に応じてまずは異なる構文とみなした方がよく、また必須性の度合いと es 構文が担う機能が密接に連動していることを明らかにした。es が必ず出現する場合に関しては、天候や時間などの外的事態の

述語が現れるときであり、任意のときは人の内面を表す述語のときであった。また es が定動詞の前以外に出現しない場合については、エピソード的な出来事を導入する場合であることを確認した。このように [es + 動詞] 構文にはいくつかのバリエーションが確認できた。しかしそれらは完全に異なるものではなく、それぞれに共通するものとして「事態の客観化」という機能が想定されることを示唆した。[es + 動詞] 構文はこのような統一性を示しつつも、統語的には異なる振る舞いを見せる、ドイツ語に特有のタイプであることが明らかとなった。なおこの構文についての分析は〔雑誌論文②〕として公刊した。

(2) [与格名詞句 + コピュラ動詞 + 形容詞] 構文の分析

この構文は非人称構文であるという点で (1) で扱った構文と関連するものである。この構文の与格名詞句の意味役割は常に経験主である。そのためこの構文を分析するにあたっては、[経験主主格名詞句 + コピュラ動詞 + 形容詞] という構文と比較することで、上記の構文の特性を際立たせるというアプローチをとった。調査はコーパスを利用してデータを集め分析を行った。その結果、[与格名詞句 + コピュラ動詞 + 形容詞] 構文は経験主が主格に現れる構文とは異なり、外界からの原因が特定できないような身体的状況をコード化する機能を有すると考えられることがわかった。またこの構文はドイツ語における生産的な構文の一つと考えられ、コンテクスト的に形容詞が上のような構文の意味と適合するのであれば広く使用可能であることが判明した。この構文についての分析は、〔学会発表⑨〕で公表した。

(3) [主格名詞句 + 動詞 + 対格名詞句 + 形容詞] 構文の分析

この構文はしばしば「結果構文」と呼ばれる構文である。結果構文はこれまでさまざまなアプローチから研究が行われてきたため、まずはそれらの整理を試みた。多くは英語の結果構文の分析を行ったものであったが、当初はその分析による構文の特徴がドイツ語にも同様に当てはまるものと思われた。しかし英語とドイツ語の結果構文の例を比較してみると、結果構文がどのような動詞とともに出現しうるかという制限において差異が見られることが明らかになってきた。そのため本研究ではその差異はどのようなもので、それが何に起因するかを、主にインフォーマントに対する調査により明らかにすることにした。その結果ドイツ語においては結果構文に埋めこまれる動詞が継続的と解釈可能であることが重要なのに対し、英語にはそのような制限がないことが明らかとなった。また同じような性質をもつと考えられる構文も、言語によって差異が見られ、またその背後にはそれぞれの言語に特有のパラメータが存在していることがわかった。この研究は今後類似の構文の比較ならびにそのパラメータの相違による説明という、構文文法における新しい展開が開けたと点で意義は大きいと言える。この研究は〔図書①〕で公刊した。以上のように本研究では全体として構文文法をドイツ語に応用することで、ドイツ語の有意義な記述が行えること、またドイツ語の構文文法的な分析を通して、構文文法の理論に対しても独自の貢献が可能であることを示すことができたと考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）

① Miyashita, Hiroyuki, Evidentialität im Japanischen: eine kontrastiv-sprachtypologische Charakterisierung, Linguistische Berichte, 査読有, Sonderheft 20, 2015 年，47-71

② Miyashita, Hiroyuki, German es – A

construction grammar approach, Yearbook of the German Cognitive Linguistics Association, 査読有, 2, 2014 年, 147-166
DOI: 10.1515/gcla-2014-0010
③宮下博幸, ドイツ意味理論と認知言語学の出会い－「エネルゲイア」としての文法研究, 独文学会研究叢書, 査読無, 99, 2014 年, 25-41.

〔学会発表〕（計　15　件）
①宮下博幸、心態詞の出現とその認知的背景、科研費プロジェクト研究会 Prosodie und Grammatik in der gesprochenen Sprache、2016 年 2 月 27 日、早稲田大学（東京都・新宿区）
②井口真一・宮下博幸、ドイツ語形容詞 ähnlich の文法化－形容詞から前置詞へ、阪神ドイツ文学会第 219 回研究発表会、2015 年 12 月 13 日、近畿大学（大阪府・東大阪市）
③宮下博幸、形容詞と与格－与格の出現をめぐる考察、ドイツ文法理論研究会 2015 年秋季研究発表会、2015 年 10 月 4 日、鹿児島大学（鹿児島県・鹿児島市）
④Miyashita, Hiroyuki, In welchem mentalen Zustand befindet sich der Sprecher, wenn man Modalpartikeln einsetzt? - Ein Modellvorschlag, Japanisch-deutscher Workshop Linguistik: Die Architektur von Grammatik und Pragmatik im Japanischen und Deutschen, 2015 年 8 月 22 日、ミュンヘン（ドイツ）
⑤宮下博幸、動詞形態と空間把握、日本独文学会シンポジウム「ドイツ語と日本語に現れる空間把握—認知と類型の関係を問う」、2015 年 5 月 30 日、武蔵大学（東京都・練馬区）
⑥ Miyashita, Hiroyuki, Partikelverben im Deutschen und Verbserialisierungen im Japanischen: Eine kontrastive Betrachtung der semantisch entsprechenden Konstruktionen, Das 16. Norddeutsche Linguistische Kolloquium 2015 年 3 月 27 日、ハノーファー（ドイツ）
⑦宮下博幸、構文文法とドイツ語教育、シンポジウム「ドイツ語教育のためのドイツ語研究」、2015 年 2 月 21 日, 富山大学（富山県・富山市）
⑧宮下博幸、接頭辞・不変化詞 über を伴う動詞における意味変種の実現について、京都ドイツ語学研究会第 85 回例会、2014 年 12 月 13 日、キャンパスプラザ京都（京都府・京都市）
⑨Miyashita, Hiroyuki, Adjective Experiencer Constructions in German: Constructional Differences and their Semantics, Sechste Internationale Konferenz der Deutschen Gesellschaft fuer Kognitive Linguistik, 2014 年 10 月 1 日、エアランゲン（ドイツ）
⑩ Miyashita, Hiroyuki, Die semantische Interaktion bei Präfix- und Partikelverben mit *über-*, 第 42 回日本独文学会語学ゼミナール、2014 年 9 月 1 日、IPC 生産性国際交流センター（神奈川県・葉山町）
⑪ Miyashita, Hiroyuki, Parenthetische *um zu*-Konstruktion im Deutschen, Parenthetische Einschübe, Internationales Kolloquium, 2014 年 3 月 28 日、クレルモンフェラン（フランス）
⑫Miyashita, Hiroyuki, Wie gleich kann eine Konstruktion sein? －Eine kontrastive Analyse der resultativen Konstruktion im Deutschen und im Englischen, Humboldt-Kolleg Kyoto, 2014 年 3 月 2 日、コープイン京都（京都府・京都市）
⑬宮下博幸、比較構文文法－ドイツ語と英語の構文の考察、第 18 回ドイツ言語理論研究会、2013 年 7 月 27 日、東京大学（東京都・目黒区）
⑭ Miyashita, Hiroyuki, Comparative Construction Grammar – One possible sketch, III International Conference on Meaning Construction, Meaning Interpretation: Applications and Implications, 2013 年 7 月 18 日、ラ・リオハ（スペイン）
⑮宮下博幸、ドイツ意味理論と認知言語学の出会い—「エネルゲイア」としての文法研究、

日本独文学会シンポジウム「ドイツ語研究に今日的自律性はあるのか—方法（論）をめぐる考察」、2013 年 5 月 26 日、東京外国語大学（東京都・府中市）

〔図書〕（計　4　件）

① Ogawa, Akio (ed.), Miyashita, Hiroyuki, Stauffenburg, Wie gleich ist, was man ver*gleich*t? Ein interdiszplinäres Symposium zu Humanwissenschaften Ost und West. 2016 年、371 (238-247)

②Japanische Gesellschaft für Germanistik (ed.), Miyashita, Hiroyuki, iudicium, Germanistische Soziolinguistik und Jugendsprachforschung, 2016 年、109 (89-108)

③澤田治美（編），宮下博幸、ひつじ書房、モダリティⅠ：理論と方法，2014 年, 271 (249-269)。

④Japanische Gesellschaft für Germanistik (ed.), Miyashita, Hiroyuki, iudicium, Beiträge zur deutschen Sprachwissenschaft, 2013 年, 169 (103-117)

６．研究組織

(1)研究代表者

宮下　博幸（MIYASHITA, Hiroyuki）

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：　20345648